

国際交流に思う

副会長 吉田 進



仕事柄多くの留学生と接してきた。国際交流に果たす留学生の役割には少なからぬものがある。以前は留学生 10 万人計画が叫ばれ、それが達成された最近では留学生 30 万人計画が叫ばれている。今こそ優れた留学生確保に向けた長期的な視点での地道な取組みが求められている。

今から約四半世紀前(1984 年)に日本と中国の政府間協定で 2 か月半中国大連へ赴日留学生の予備教育に出かける機会があった。中国全土から集まった留学生は素晴らしい逸材ばかりであった。滞在の最後に中国国内を見て回る機会があったが、そのとき既に中国はアフリカから多くの留学生を受け入れて支援しており、立派な宿舎(寮)まで完備している状況を見聞きした。最近でこそその関係が取り沙汰される中国とアフリカであるが 1980 年代初頭に既に留学生を介した交流を行っていたことには驚かされる。また一方、中国の南京大学が米国のジョーンズ・ホプキンス大学と合同で 1986 年に南京大学構内に設立した全寮制大学院では、毎年 50 名もの米国人学生を受け入れて中国人学生と一緒に住ませ、若いときから相互理解を深める取組みを行っているという。

欧州では 1987 年にスタートしたエラスムス計画と呼ばれる EU 加盟国間の学生と教員の流動性を高め相互理解を深めるための大学間短期交換留学制度があり、現在では年間 10 万人以上の学生が利用していると聞く。最近では対象を EU 以外にも広げたエラスムス・ムンドゥスへと発展している。

ごく最近日本の JICA (国際協力機構) の依頼でタイのバンコクで開催された ICT 技術に関するワークショップに参加し、ASEAN 諸国の人材育成プログラム AUN/SEED-Net の存在を知った。その会議のオーガナイザは現地の大学の幹部を務める元日本留学生であり、そこで日本留学経験があり国際交流事業にも熱心なタイやインドネシアの大学幹部の方々と親しく話を交わす機会があり、いまさらながら国際交流事業そして留学生の果たす重要性を再認識させられた。

もちろん、学生交流のみならず若手研究者同士の交流促進も重要である。自身の経験からも、若いときに出会った外国の友人は得難い存在である。最近ともすれば内に閉じこもりがちなの日本の若い学生や研究者の皆さんにも若いときこそ是非とも外国との交流を体験し、国際的な視野を涵養してほしい。醍醐味は何といってもカルチャーの違いの発見である。「ユダヤ人と日本人」「国家の品格」等々、日本と外国との比較についての種は尽きない。自身で経験した話題では、「日本人はなぜ車をぴかぴかに磨くのか?」「日本ではなぜ電信柱やテレビのアンテナを無造作に林立させるのか?」「なぜ米国のベル研で働く日本人研究者は少ないか?」等々がある。1980 年代に米国訪問時に、故小川謹一郎博士から米国のベル研で働く韓国や中国からの研究者の数は 3 けた、一方日本出身の研究者は 1 けたしかない聞き驚いた記憶がある。

ただ、優れた留学生の受入れや外国人研究者の招へいには大学卒業後の雇用問題や家族の居住環境の整備等解決すべき課題は山積している。例え優秀な人材であったとしても企業の幹部への登用などはまだまだ不十分ではなかろうか。そういう意味では大学の外国人教員の採用数も少ない。また、留学生が帰国した後も何らかの継続的な支援を続けることも大変重要である。幸い本会も現在アジアとの連携強化に向けて海外セクション代表者制度を設けるなど国際交流の強化を図ろうとしている。今こそ長期的な視点で、日本で学び、日本の良き理解者となり、そして国際的な視野のもとグローバルに活躍する人材育成に大いに貢献したいものである。